詩篇61篇より

0 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデによる

1 神よ。私の叫びを聞き、私の祈りを心に留めてください。
2 私の心が衰え果てるとき、私は地の果てから、あなたに呼ばわります。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。
3 まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。
4 私は、あなたの幕屋に、いつまでも住み、御翼の陰に、身を避けたいのです。セラ

5 まことに、神よ。あなたは私の誓いを聞き入れ、御名を恐れる者の受け継ぐ地を私に下さいました。

6 どうか王のいのちを延ばし、その齢を代々に至らせてください。
7 彼が、神の御前で、いつまでも王座に着いているようにしてください。恵みとまことを彼に授け、彼を保つようにしてください。

8 こうして、私は、あなたの御名を、とこしえまでもほめ歌い、私の誓いを日ごとに果たしましょう。

詩篇 56～60 篇は「ミクタム」と呼ばれる詩篇でしたが、61 篇からは比較的短い詩篇が続いていきます。この 61 篇はその背景が掴みにくく、様々な説があります。ダビデが遠征中に故国を思い出している詩篇なのか。サウルから逃亡していたときの祈りか。あるいは息子アブシャロムの反逆によって都落ちし、ヨルダン川の東にあるマハナイムという僻地を彷徨っていたときの詩篇か。全体的な雰囲気から見て、アブシャロムの乱を背景に読むと理解しやすそうです。

１～４節の内容をご覧ください。ダビデは神に向かって叫んでおり、自分の祈りが神の心に留まることを求めています。ダビデの「**心は衰え果て**」（２節）、「**地の果て**」（２節）にいるかのような孤独の中で神を呼び求めました。自分の命を狙っているのは、他ならぬ我が息子なのです。アブシャロムは地道に民の心を盗み（Ⅱサムエル 15:1-6）、父親の側女をも寝取りました（Ⅱサムエル 16:20-22）。アブシャロムはこのような行動をもって、自分がダビデ不在の王宮を引き継ぎ、王位を継承したことを公に宣言したの

です。それによって親子関係は決定的に分裂しました。

アブシャロムの部下によって命を狙われるようになったダビデは、神の守りを求めて祈りました。彼が用いている「神の守り」を象徴するいくつかの表現に注目しましょう。

「**高い岩**」…神殿が立つ岩山のことで、神の臨在を表す

「**避け所**」…神殿の聖所において神が保護してくださること

「**やぐら**」…城壁に立つ塔のことで、神が敵の襲来を見張っている様子を表す

「**幕屋**」…神と人が出会う場所

「**御翼の陰**」…安置された契約の箱の蓋を見守るケルビムの翼からきたイメージ

私たち読者も祈りの中でこういう表現を用いて神の守りを表現することができます。「主よ、あなたは私にとってこういう存在なのですから、お守りください」と。

さて、５節では祈りが聞かれた確信が表明されています。「**誓い**」という言葉にドキッとさせられませんか。悩みと悲しみの中で神に誓いを立てた事柄があったのでしょう。「あなただけを信頼します」「地上のものには依り頼みません」という誓いです。人が握りしめている「地上のもの」への信頼を手放し、神にのみ頼るとき、そこに神の力が現れます。神は「**御名を恐れる者**」に心を留めてくださるからです。

６～７節では、唐突とも思われる「王のためのとりなし」が登場します。ダビデ王自身が自分のために語っているとすると、そこには王であり続けるための決意が読み取れるでしょう。王という立場には、民全体の霊的・物質的生活を担う責任があります。同時に、常に命を狙われる立場でもあります。現に命を狙われながらも王であり続けようとするところには、正式に油注がれた者として譲れぬ思いがあったとともに、民の幸福を心から願っていたからでしょう。政治力なしに野心だけで王にのし上がろうとしているアブシャロムに国を任せてしまったら、イスラエルは瞬く間に崩壊していくからです。ダビデは何としても国を守らなければなりませんでした。

この詩篇は、全生涯を通じて感謝をささげるとのダビデの誓いでもって終わります（８節）。困難の直中にあって、神にのみ希望を置き続ける詩人の信仰から学ばされます。私たちが人生で依り頼んでいるものは何か。今一度自分の心に問うてみましょう。